

取り扱い説明書 2「山登文庫のささやかな利用の仕方」

☆はじめに

山登義明です。ようこそワンダーランド「山登文庫」へ。文庫を作っていただけで2ヶ月ほどになろうとしています。近況報告を兼ねて、また少し文庫の利用の仕方をお伝えしたいと思います。

1月末にNHKエンタープライズのオフィスを離れました。47年勤務した放送局から完全にフリーの身になりました。名刺はまだありません。そろそろ作ろうかなと考えていますが、どういう肩書きにすればいいか。テレビプロデューサーというのをメインの肩書きにして、その下位に今教えている大学の非常勤講師の名前を2つほど入れておこうかなと考えています。宮仕えが長かったせいか、なにか組織の名前がないと心細い思いがあるからですね。もっとしっかり自立しなくてはと自分を励ましてもいるのですが。

さて、今回は個別の本の魅力をすこし語っていきます。

☆ 本のコンシェルジュとして一言

この文庫をかつて活用していた者として、ニューカマーである市民のみなさんとりわけ中高生の若いみなさんに、私がこの文庫のかしこい使い方、利用の仕方のコツをお教えしたいと今回しゃしゃり出て来ました。ちょうどホテルのフロントなどにいる多用な客のリクエストに応じてサービスをするコンシェルジュのように。ちょっと先輩面します。

*

*

*

単行本の中から

あつかましいのですが、自分の著作を取り上げます。

その他 No. 469 「もう一度、投げたかった」(山登義明 / 大古滋久)

これは1994年春に放送された同名のNHKスペシャルの書籍化された単行本です。共著者の大古は、当時わたしの同僚で、本番組のディレクターを担当しました。私はプロデューサーです。

大古は広島出身の地元もんでした。東大工学部を出た気のない

いやツですが、番組を作る能力は文系に比べると、いまひとつでした。そこで私は「お前の好きなモノは何だよ？」と訊ねると、即座に「広島カープ」と応える。「何がいいんだ？」「津田のピッチングすよ」とえらそうに言う。「じゃあ、それを番組にしたらどうだ！」とそそのかすと、大古は悲しそうな顔をしました。

「津田さんは去年死んだんですよ。番組にはなりません」本当に口惜しそうに大古はつぶやきました。そんな馬鹿なことはない。

死んだ人が主人公になれないなんてことは偏見だ。描き方次第だ、語り口だ、それを見つけることが大事なんだと、私は大古に檄を飛ばしました。そして、こう引導をわたしました。

「今から一週間おまえにやる。その間に津田さんのことをリサーチして、番組の企画書と構成案を書いてもってこい。それまで出勤に及ばず、潜入取材開始！」

その日から本当に大古はいなくなりました。カープ取材だから広島市内にでもいるだろうと夕力をくくっていました。ところが1週間経っても連絡がないのです。やきもきしました。10日目、電話連絡が入って、山口県にいると告げます。「何をやっているんだ！」と私は怒鳴り声をあげました。

「津田さんのふるさとの新南陽市に来ているんです。もう少し取材をさせてください。お願いします」と大古はクイサガリます。

何が、この温厚な彼をそんな思いに駆り立てたのだろうか、私はちょっと引っかかるものを感じました。すこし考えて黙り込んだ私に、大古は調子にのって、ふざけた要求を出してきました。

「これから九州に行きます。結果は今週末に報告します、それまでリサーチ延長お願いします」私「?!・・・?」「・・・ちょ、ちょっと待て。なんで、そんな遠い所へ行くのか??」返事はありません。

――電話は切れていました。

そして、約束通り、週末に大古はオフィスに現れました。着たきり雀のよれよれのシャツに取材バッグひとつ持って。すこし日に焼けて疲れているように見えたが、顔は笑っていました。「見つけました。奥さんの晃代さんが闘病記をつけていたんです・・・。」

ここから、名作「もう一度、投げたかった～炎のストッパー 津田恒美の直球人生」が生まれていくのです。平成6年7月14日放送されると、東京地区での視聴率15・6%。広島地区では、なんと42・7%という驚異的な数字をはじめ出したのです。

☆ 人生のしみじみを味わいたいと思ったら

吉野弘 No. 1 1 「叙景」 (吉野弘)

吉野さんは一昨年死去されましたが、美しい言葉をたくさん残されました。「夕焼け」という詩は小学校の国語の教科書にも載っています。「祝婚歌」という詩は披露宴でよく朗唱されると聞いたことがあります。

完璧をめざさないほうがいい
完璧なんて不自然なことだと
うそぶいているほうがいい
二人のうちどちらかが
ふざけているほうがいい
ずっとけているほうがいい 「祝婚歌」より

現代詩人ですが、けっして難しい言葉は用いません。が、内容は深遠で、人生の秘密や奥深さを語ったものが多いのです。吉野さんは山形出身で、若い頃労働組合のことで苦勞なさったと聞きます。人間関係の機微には敏感でしたが、けっして不正を許さない人でした。詩にもよく表れています。私は吉野さんと

ラジオ番組 4 本、テレビスタジオ番組 1 本、旅のドキュメンタリー 1 本を制作させていただきました。

ラジオはディスクジョッキー形式の番組で、自分の好きな音楽や映画テレビのことを語っていただくのですが、吉野さんは当時山田太一脚本に夢中でした。その質の高いヒューマニズムに深い敬意をもっておられました。この番組のテープを山田さんに送ったことから、お二人につながりが出来たと記憶しています。二人を結びつけたということで、ちょっぴり私も誇りです。

旅の番組は、私の長崎時代の作品で、長崎外海地方のキリシタンの足跡を追う番組「西海の夕焼けを見たことがありますか」でした。この旅の途中で、8月9日の原爆の日と遭遇します。吉野さんは浦上の墓地で1歳から60歳までの一家5人が同じ命日であるのを見て絶句し、顔を歪めます。あらためて詩人の感受性の凄絶さを目の当たりにしました。その番組が無事放送された後、吉野さんから自身の詩の一節を書いた揮毫が届きました。長く私の部屋に架かっています。

吉野さんの風貌や言葉づかいは、なんとなく同郷の藤沢周平を思い出させます。朴訥で頑固でやさしい人柄。その人柄そのものの詩を存分に味わってほしいのです。でも、申し添えますと、吉野さんの言葉は平易ですが、その技巧、内容は実に深い

ものがあります。元来、同人「荒地」で鍛えられた筋金入りの現代詩人ですから。「叙景」とは吉野さんの造語です。叙情は心の思いを述べるというほどの意味だとすれば、風景をして語らしめる「思い」というようなことを表すのではないのでしょうか。同じ風景を見ても、吉野さんの目を通すとまた違うものになるということを痛感する詩集です。

この文庫には吉野さんの詩集や詩論があります。ぜひ他作も読んでください。